

校種別研究

平成 21・22 年度 高等学校部研究推進委員会計画

高等学校部研究部長

鹿間久美子

研究主題 性教育における理論と実践の検討

—養護教諭の「性教育に関する推進者」としての資質向上のために—

キーワード：性教育、理論、有効性、推進者、養護教諭

I はじめに

1 研究の背景

これまで、学校における性教育は、性に関する正しい知識を伝える役割を担ってきた。同時に、性教育は子どもたちに「豊かな人間性」を身につけさせることを目的として行われてきた。そのために、新潟県養護教員研究協議会高等学校部では、性教育に関する次のような研究を行ってきた。

性に関する初めての研究として、昭和 46 年（1971）「性指導のすすめかたについて」というテーマが掲げられ、2 年間の研究が行われた。その後 20 年以上は、性に関するテーマを取上げていないものの、平成 5 年（1993）からは、『『豊かな人間性をめざす性教育の研究』—エイズを含む性に関する指導はどうあればよいか—』をテーマとして本格的な研究を行っている。研究内容は、生徒や教諭および養護教諭の実態調査結果・各教科との関連・特別活動を中心とした年間計画の作成・高等学校における実践結果などで、4 年間の研究内容を報告した。また、平成 9 年（1997）からは、性に関するテーマではないものの、健康相談活動や養護教諭が支援した、性に関する個人指導の報告が見られる。そして、平成 15 年（2003）から平成 20 年（2008）までは、「生きる力をはぐくむ性教育の在り方」をテーマに、性教育に関する充実した研究活動が進められてきた。

以上のように高等学校部の養護教諭は、各自の学校における性教育の発展に向けて、推進者としての役割を担い、生徒の「豊かな人間性」や「生きる力」を育むために、多くの性教育に関する実績を残してきた。平成 19・20 年度にご指導をいただいた岡田先生は、「この地区は研究の進め方について、組織的にきちんと行っている。実態調査を行い、研修会などで勉強し、その後実践に戻すといったプロセスを、2 年サイクルで行っていて、ステッ

プアップしている。」と述べている。その上で、「もっと社会や保護者が一体となって教育を行わなければならない時期にきている。そのためにも本当の子どもの姿や、実態が把握できる保健室での姿をきちんとキャッチし、教育の課題を社会に伝える必要がある。それを形にして伝えることができるのが研究である。」と今後の方向性を示唆している。

2 研究の動機と目的

これまで、性教育に関する研究を積み重ねてきたことで、多くの高等学校では、生徒を対象に性教育の講演会が開催されるようになった。また、私たち養護教諭が行った実践について数多く報告する中で、養護教諭自身の取組を振り返るチェックシートも作成された。

そこで、高等学校部では、私たち養護教諭が「性教育に関する推進者としての役割」を一層充実させることを目的として、研究を進めて行きたいと考えた。そのためには、20年度に「社会や保護者が一体となって教育を行わなければならない」や「教育の課題を社会に伝える」と示された今後の方向性を前提として、具体的には、研究の結果を、次のような性教育に関わる課題の解決につなげたいと考えた。

例えば、20年度末に調査した「アンケート感想」の結果を見ると、「教職員の理解を得ることは性教育を進めるためには欠かせない」という意見が多く見られる。この「教職員の理解を得る」には、学校長を始め教職員に「学校において性教育を進めることの重要性を説明する」という対応が求められる。そのために「性教育に関する推進者」は、性教育に関する理論的な裏付けを明確にしておく必要がある。即ち、私たち養護教諭が性教育に関する理論的な裏付けを理解していることは重要であろう。

また、性教育の実践結果を数値化して有効性を検証し、教職員だけでなく外に向けて示す手法を身に付けることは、性教育を継続して実施し、自校において定着させるために役立つものと思われる。

以上のことから21・22年度は、第1に、学校内で養護教諭が「性教育に関する推進者としての役割」を一層充実させるために、「**性や性教育に関する理論を明確にして示すことができる**」を目指す。第2に、すでに多くの学校で行われている性教育の実践について、実践結果や評価を、外に向けて説明できるように、「**生徒に行った性教育実践の有効性を検証し、結果を明確に示すことができる**」その具体的な方法を身に付けることを目指して研究を進めたいと考えている。

3 研究の独自性

第1に、新潟県養護教員研究協議会高等学校部の研究からは、性教育に関する理論的な

研究をおこなった報告は見られない。また、養護教諭が作成した、性や性教育の理論に関する検討および、資料としての報告は全国的にも確認できなかった。

第 2 に、性教育の実践における、生徒を対象とした有効性の検証については、個人レベルでの報告は見られるが、高等学校部の全養護教諭がかかわった研究は行っていない。

II 研究方法

1 理論的研究 「性や性教育に関する理論を明確にして示すことができる」について

(1) 性や性教育に関する理論（概念や定義など）となる文献を検索し、分析および検討した後、資料を作成する

- 【方法】
- ・ 各自の持つ書籍や、自校・地域・大学等の図書館およびインターネットを活用し情報を収集する。合わせて、研究推進委員が性教育研究機関などの情報も収集する
 - ・ 収集した情報を、**統一した様式のシート**に記入する
 - ・ 地区研修会に持ち寄り検討する（全県研修会でグループ討議や発表を行うなどの方法も考えられる

【内容】① 性とは何か

- ② 性教育とは何か（性の健康教育を含む）
- ③ 学校における性教育とは何か（歴史的経緯・性教育における不易と流行等）
- ④ 性教育と心の教育および道徳教育等とのかかわり
- ⑤ 性に関してどのような知識・態度・行動が身につけている大人を目指すのか
- ⑥ その他

(2) 性（セクシュアリティ）や性教育に関わる講演を聴き①~⑥の内容についてまとめる

（講師） 高村寿子 自治医科大学教授

(3) **養護教諭対象の調査**を行い現状を把握する。その後、研究を進める過程においても追跡調査を行い、研究を行ったことによる変化を検証する。

- ① 予備調査 研究推進委員を対象に、1 年次第 2 回研究推進委員会で実施（調査項目など内容の検討、修正）

- ② 事前調査 高等学校部の全養護教諭を対象とした、1年次地区研修会～全県研修会までに実施（研究開始前調査）
- ③ 事後調査（1）高等学校部の全養護教諭を対象とし、1年次全県研修会で実施
- ④ 事後調査（2）高等学校部の全養護教諭を対象とした、2年次全県研修会で実施（追跡調査）

2 実証的研究 「生徒に行った性教育の実践における有効性を検証し、結果を明確に示すことができる」については、各校で行われた性教育が、生徒に有効であったのかを検証する手段や方法を身につける。

- (1) 21年度～22年度7月の期間に性教育の実践を行なう
 - ・性教育の実践は、集団指導や保健室における個人指導、また、自らの実践や他の教諭および外来講師など他者による実践のどのような方法でも良い
 - ・実践状況を、統一した**記入シートの様式**で作成する
- (2) 性教育を行う対象**生徒の調査**（調査用紙は全県統一が可能か委員会で検討）
 - ① 事前調査（指導開始前調査）および事後調査（指導直後調査）を比較する
 - ② 可能であれば、追跡調査（指導後3か月～6か月後調査）を行う方法や、指導を行っていない別の集団（対照群）に調査を行い比較する方法を試みる
 - ③ 性教育の実践を行えない学校は、他校と協力して、調査や集計を分担するなど柔軟な方法も検討する。（実践担当・対照群調査担当・集計担当など共同作業で行う）
- (3) 有効性の検証
 - ① 実際の集計結果により、事前調査・事後調査などを比較し、指導の有効性を検証する
 - ② **ワークシート**と電卓だけを使って、手軽に誰でもできる χ^2 検定方法の紹介（21年度全県研修会）

3 性教育関連の講師や連携が可能な外部機関の一覧（内容や費用・連絡先など）作成

III その他 全県研修会の実施は10月26日（月）・会場は新潟会館